

第35回

第4章 現代を生きる人間の倫理

## 自然や社会技術と人間

今回学ぶこと

近代社会の基本的な考えかたである機械論的自然観の考えかたを学習する。つぎに社会科学においても実証主義が勃興したこと、自然科学における進化論を社会に応用した有機体論の考え方が発展したことを理解する。また、機械論的自然観を克服するために、スピノザ、ゲーテ、シュヴァイツァー、ガンジーなどがどのように自然をとらえたのかを理解する。



講師  
千田有紀

今回のキーワード！

機械論的自然観／ニュートン／パラダイム／  
進化論／生きた自然

### 近代的自然観

近代になって、デカルトやニュートンに代表されるような機械的自然観が一般的になった。この機械論的自然観とは、自然は、ある種の規則に従っていて、数量化でき、機械の運動と同じようにみることができるといふ考え方がある。デカルトは徹底的に身体を物質としてとらえ、ニュートンは、万有引力の法則によって、自然の運動を説明した。

これに対し、中世以前に存在した目的論的自然観は、身体を含む自然界の一切の出来事は、目的によって規定されていると考える見方である。人間の身体は「靈魂」のためにあり、その身体の部分もそれぞれ「目的とする機能のためにある」と考えたアリストテレスや、神が自然をつくったと考えるローマ・カトリックなどが、代表的な目的論的自然観である。

このような目的論的自然観から機械論的自然観への転換は、「パラダイム」が転換したといえる。

## 実証主義と進化論

自然科学の分野での目覚ましい発展と、さらに産業革命によって技術が進歩したことがあいまって、19世紀には人間の社会を考える時にも、自然科学的な方法を取り入れようという潮流が生まれた。コントに始まる実証主義である。

自然科学が社会に大きな影響を与えたものとして、進化論がある。19世紀の半ばに、ダーウィンは『種の起源』をあらわし、生物はすべて共通の祖先から枝分かれして進化していったと主張した。またスペンサーは、より環境に適応したものが生き残るという適者生存という概念を社会に応用し、社会を有機体としてとらえた。

これに対し、ベルグソンは、進化を枝分かれさせていくことを推し進める力を、生命の跳躍（エラン・ヴィタール）と呼んだ。そして機械論的自然観が生み出す問題を克服するために、愛の跳躍（エラン・ダムール）に着目し、共同体の内部に閉じこもらない「開かれた社会」の実現を唱えた。

## 自然との調和

スピノザは、機械論的自然観の問題を克服しようとし、神即自然、「自然の何処にも何にもでも神がいる」という考えかたを提唱した。

このスピノザに影響を受けたドイツの詩人ゲーテは、理性的な存在としての人間と、単なる物質や手段に貶められている自然という分離を批判した。人間とは自然のなかに生き、人間の生命と繋がりが合っているのだという「生きた自然」という考えかたを提唱したのである。

このゲーテに共感し、「生命への畏怖」という思想を打ち立てたのは、神学者、音楽家であり、医師でもあるシュヴァイツァーであり、「自分は生きようとする生命に囲まれた、生きようとする生命である」と考えすべての生命に愛という畏怖の心を持った。

インドの独立運動の父と呼ばれるガンジーの実践したアヒンサー（不殺生、非暴力）という考えかたも、機械論的自然観の克服の例である。